



TITLE:

博箸博碁博鎮博局

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. 博箸博碁博鎮博局. 東洋史研究 1947, 9(5-6): 197-203

ISSUE DATE:

1947-08-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145842>

RIGHT:

博箸博碁博鎮博局

水 野 清 一

『戰國策』齊策には六博と蹋鞠、『史記』滑稽傳には六博と投壺とがならび稱せられてゐるが、漢代以後には樗蒲と博戲とがつねに並稱されてゐる。樗蒲は博戲の一種で、これから出たものらしい。魏晉南北朝時代には非常にさかんにおこなはれ、そのため各自の業をおこたるもの多く、識者の指彈をかうむるものがあつたといふ。『太平御覽』卷七五四にひく『晉中興書』によると、陶侃の傳にかれが荊州刺史になつたとき部下が博奕にふけたといふので、その戲具をすつかり江中に投じ、「圍碁は堯舜がもつて愚子に教へ、博は商紂の造るところ、諸君は國の器をいだし、何ぞもつて此をなすぞ」といつたとある。『晉書』卷六六陶侃の傳によると、陶侃は酒器蒲博の具を投じて「樗蒲は牧豬奴の戲のみ」といつたといふ。とにかくかういふふうであるから、その流行のさまが知られるとおもふ。

『楚辭』の招魂には宴樂のあとに博戲をしたことがみえ、

菀蔽と象碁の 六博あるあり

曹を分つて並びすゝみ 遁りて相迫る

梟にして牟ち 五白をよばふあり

といふ。『列子』の説符にも

樂を設け 酒を陳ね 樓上に博撃をつ 俠客相隨

ひて行く 樓上の博するもの射す 明瓊張中して

兩魚を反して笑ふ

といふ。これだけではなほそのあそびかたが、わからぬけれども、その張湛の注には「古博經」なるものを引用してつぎのごとく説明してゐる。

博の法は二人が相對坐して局に向ふ 局は分かれて十二道たり 兩頭の中に當れるを名づけて水となす 碁を用ゐること十二枚 六白六黑なり 又

魚二枚を用ひ水中に置く。その采を擲つは瓊を以て之をつくる。瓊の罫方は寸三分。長さは寸五分。その頭を鋭にし。瓊の四面に鑽刻して眼となす。亦は名づけて齒となす。二人が互に采を擲ちて碁を行ふ。碁の行き到る處。即ち之を豎つ。名づけて驍碁となす。即ち水に入りて魚を食ふ。亦率魚とも名づく。一魚を翻すごとに三籌を獲る。若し己に兩魚を牽き而も勝たざれば。名づけて被翻雙魚と曰ふ。彼家六籌を獲て大勝となす。

これによるとおぼろげながらわかる。局面も正倉院のやうな雙六盤を推想することができる。^①長手の局面をたてに四分し、中二道をのこして左右端の一道にそれぞれ棊でもおくべき十二の小區をもうけてゐる。そしてそれは『列子』の記事にもほど符合してゐるとおもふ。駒井和愛君が、かつて漢鏡から推論したやうな方格規矩式の局面ではなさうである。

① 『正倉院御物圖錄』第八冊、第十一―十五圖

② 『漢代の六博に就いて』(考古學雜誌、第三三卷二號)

遊戲のこまかいことは、もとより今日から知りたがいが、最近の發掘遺物によつて若干のかがへをのべ

てみたいとおもふ。

その一は博箸博碁である。漢代の六博が六箸十二碁をもちひて勝負をしたことは、まづ『說文』の「博は局戲なり、六箸十二碁なり」とあるのであきらかである。

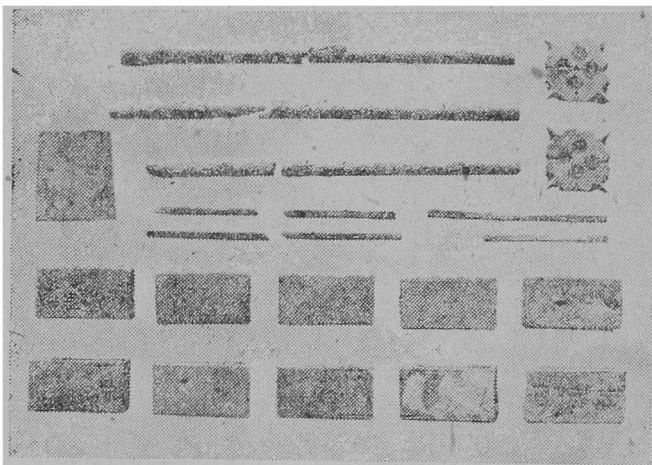
箸は蔽とも、箭とも、また碁ともいはれ、これを投じて十二碁をうごかすのである。碁は黑白で敵味方をわかち六碁づゝ、^③これで六博あるひは六六之博の名がある^④のであらう。『楚辭』招魂に「崑蔽と象碁の六博あるあり」とあるから、箸を崑玉でつくり、碁を象牙または骨でつくつたものらしい。『山海經』の郭璞の注には、「漆吳の山の博石はもつて博碁をつくるべし」といふから石製のものもあつたにちがひない。『太平御覽』卷七五四にひく「述征記」にも、「極西南端門のそとに石あり、石色青くして細かなり、これを修めて博碁をつくり、もつて江東におくる、甚だ珍玩すべし」といふ。また『韓非子』外儲説には、秦の昭王が「松柏の心をもつて博箭をつくつた」といふから、木でつくつ

たものもあつたのであらう。『西京雜記』卷四には、「竹をもつてこれをつくる、長さ六寸」といふ。もとより箸、箭、簞、筒みな竹にしたがふから、竹製のものが、もつとも普遍的であつたことも推察できる。

ところが昭和十七年蒙疆陽高縣古城堡の漢墓發掘中、その第十二號墓から骨製の箸のやうなものと骨製の麻雀牌のやうなものがでた。箸はすくなくとも三本はあつたし、牌も十個はあつた。この箸が食用のいはゆる箸敏でないことは、案盤とはなれてあつたことからすぐ推察できた。こまかい刻線の禽獸流雲文があり、すこぶる手のこんだものである。完全なものがないので全長のほどはわからぬが、長さほど十二センチと推定して漢の六寸にあたる。

骨牌の方は方一センチ七で、長さは三センチばかり、長方形の四面にはみな同形の動物を線刻してゐる。よくみるとこの動物は虎と龍との二種ある。虎のものは四面とも虎で、龍のものは四面とも龍、前者は刻線の溝に朱をふくみ、後者は緑青をふくむ。かぞへてみると虎のもの六個、龍のもの四個である。ところが實は發掘の混雜にまぎれて一個喪失した。その一個がど

ちらであるかわからぬが、とにかく十一個以上あつたことはたしかである。それで虎の六個を完數とすれ



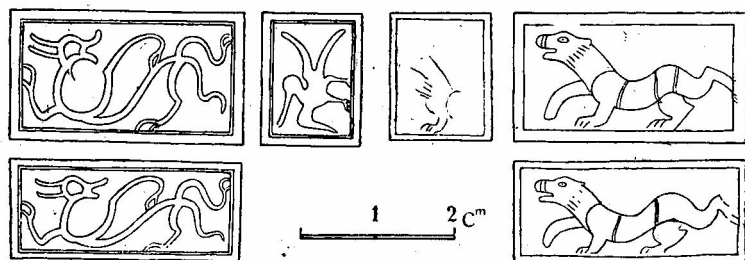
第 一 圖

1. 蒙疆陽高縣古城堡第十二號墓出土博箸博棊等

ば、龍もやはり六個あり、合計十二個あつたのかとおふ。

第一圖にかゝげたものはその現存の十個で、第二圖

はそのうち龍虎の二種類である。



第 二 圖

2. 蒙疆陽高縣古城堡第十二號墓博朱測圖

の土中に人知れずまぎれこんでしまったとしてもこれ

一方の小口にみえてゐるのは鳥、つまり朱雀である。他の小口はなんであるかよくわからない。四神をあらはしたとすれば玄武でなければならぬが、しかとさうとはいへない。虎、龍をゑがいた面のはがちがふのは骨がやせたからで、もとは同一であつたとみられる。骨はかなりいたんでゐるから、もう一個が土中で消滅してしまつたとしても可能である。それとともにまた發掘

もまたありうることである。

たゞ文献にいふ黒白の二墓とはちがふが、朱虎、緑龍の二種であることは、かへつて相關ふ二墓の構想として漢人のかんがへにふさはしいとおもふ。

第一圖の上中央は折れた骨箸である。同様な骨箸と骨牌とは古城堡の第十七號墓からもでた。また昭和十九年にはおなじく第二十號墓からも骨箸がでた。

これに關聯して若干述べておきたいことは、これといつしよに第十二號墓から骨製で麻雀のかすとりやうなもの、また骨製でマツチの軸木のやうなものが出土してゐることである。後者は第一圖のなかほどに數本しめされてゐるが、これは發掘の當初からなにかさういふあそびの局板を想像せしめた。といふのはこの軸木のやうなものが連續していで、そのあひだに黒漆の存在をおもはすやうなものがあつたからである。つまり、これを象嵌して界畫をつくつた局盤である。ちやうど正倉院にある象嵌の盤局をおもはすものがある。^⑥

これに對し前者の方はうすい薄片で、まづかすとり、いはゞ『説文』の籌とかんがへたのである。もつとも、

これが博箸、博箭でないかといふうたがひもおこらないことはない。しかし、もし前述の骨箸を博箸とすれば、これは箸とかんがへてよからうとおもふ。これに似たものは古城堡第二十號墓からもでたが、懷安四吃塔波の漢墓からも竹製のものが出土してゐる。^⑦

- ① 『楚辭』招魂王逸注、『韓非子』外儲說、『方言』
- ② 『楚辭』招魂王逸注
- ③ 『說文』局字
- ④ 『楚辭』招魂、『西京雜記』卷四
- ⑤ 『荀子』大略篇
- ⑥ 『正倉院御物圖錄』第八冊第十六、十七圖
- ⑦ 『萬安北沙城』（東方考古學叢刊乙種第五冊）圖版六六

二

つぎは博鎮博局である。

陽高古城堡第十二號墓では、右の骨箸骨棊と接して四個の墓鎮がでた。墓鎮は金銅のうへに貝をかぶせたもので、そのかたちは羊のうづくまつたすがたをあらはしてゐた。腹のなかにはなにか鉛のやうなものが充填してあるらしく、すこぶるおもい。とにかくなにかをおさへる鎮子にはちがひない。それが方七十センチ

の漆板の四隅に整然とおかれてゐた。また第十七號墓ではやはり金銅の羊の鎮子であつたが、それが方七十センチの石板の四隅にこれも整然とおかれてゐた。石板は斑文のある石灰岩で、あつさ五センチ、四隅にひくい脚があり、その中央にまいるいへそがある。板面はなんの界畫もなく、文様もなく、たゞ平滑な石の面である。萬安北沙城第六號墓の發掘でも、虎をかたどつたかとおもはれる鐵の鎮子が方四十五センチの四隅に整然としてあつた。しかし、そのしたには織物の痕跡をみたのみで、それ以上のことはわからなかつた。

方形の板はこれ以上の知見はないが、鎮子の方は從來ともかなり知られてゐる。平壤樂浪の第九號墓からも盤踞した虎のみごとな青銅鎮子が四個そろつてでゐる。^①これに似て、やゝきやしやな一例はもとの笹川愼一氏の蒐集品中にもあつた。^②また山口謙四郎氏の蒐集品中にも蛇の盤踞したものが一個あつた。^③住友家の金銅龍虎もみごとであるが、またこの種の鎮子の遊離したものであらう。^④萬安北沙城のものは鐵であつたが、京都帝國大學にはやはり鐵製品で、鳥のうづくまつたかたちのものがある。厚和の購入品である。それから最

近には白色大理石の虎鎮が四個將來されて、二個は後藤眞太郎氏、一個は井上恒太氏、一個は内田誠氏の所蔵になつてゐる。

それからこれははじめから埋葬の假器としてつくられたかも知れぬが、いぶし手のくろい瓦製のものがある。かたちは虎のうづくまつたもので、山本發次郎氏の蒐集である。

とにかくかたち材料はさまざまであるが、これらが鎮子であるといふことはそのまとまつた形體、づつしりした重量からいつてまちがひない。支那の古玩舗はこれを壓袖と稱してゐる。^⑥

ところが、『説文』の鎮の字には、「鎮は博の壓なり」といつてゐる。博はもとより籀で、六博につかふなにかのおさへといふ意味である。なにをおさへたか、どんなかたちをしてゐたか、もとよりこれだけではわからない。けれども、この文面をみ、また方板のうへに整然とならんだこの鎮子をおもふと、なんとなく博の鎮ではないかといふうたがひを禁じがたい。もしそうとすると、そのしたの方板はまさしく博の局であるといふことになる。

『説文』局の字に、「一に曰ふ、博の以つて碁を行ふ所、象形なり」とある。この方板をなかにして兩人相對局するのである。古城堡第十二號墓の方板、また北沙城第十六號墓のものはいまこれを想像することはできない。古城堡第十七號墓の石板がたゞひとつの例である。しかし、この石の方板にはなんの區劃條線もない。畫象石にみられ、方格規矩鏡で察せられるやうな局板の界畫は毫もみられないのである。果してこれが博局であらうか。もちろん、うたがひがおこらないわけはないけれども、鎮子との關係をおもへば、一應博の局と解することができようではないか。そのばあひ局面の碁をやる界劃はきれとか紙とかにあり、これを四隅の鎮子でおさへるといふこともかんがへられるであらう。

① 關野貞等『樂浪郡時代の遺蹟』上冊圖版四〇

② 『笹川慎一コレクション』

③ 『刪定泉屋清賞』圖版四四

④ 梅原未治、水野清一「傳長沙出土の漆奩木彫雙鶴雙蛇に就いて」(美術研究第七二冊)第三圖

⑤ 『萬安北沙城』第十三圖

⑥ B. Laufer, *Jade*, Chicago 1912, pp. 306-308

三

しかしこゝで問題となるのは、第十二號墓の鎮子と局板とはいつしよにいで、骨箸、骨棊、骨簪、骨線とは別にかたまつていつしよにでたといふことである。第十七號墓でも、とにかく方形の石製局盤のほかに骨線があつて、別種の局盤が存在することをものがたつ

てを。このばあひ、どちらを博具とし、どちらを他の局戲とするかといふことはにかに決定できない。博箸、博棊、博鎮、博局の解は、要するにわたくしの想像である。けれども不可能な想像ではない。もつとも可能な想像である。わたくしは發掘に即し、遺物に即して、かうかんがへざるをえないといふところをしめし、あとは大方博雅の叱正をまちたいとおもふ。

ドルメンに關する最古の記錄

有名な董仲舒の弟子に陸弘といふものがあつた。彼は昭帝に對して、公羊の災異應驗說と革命說とを結び付け、その禪讓を建白したため、時の權力者たる霍光により、この上奏文を取次いだ宦官と共に誅されてしまった。『漢書』七十五卷の同傳にはその經過が記されてゐるが、そのそもその初めは左のやうな事件からである。

孝昭元鳳三年正月。泰山萊蕪山南。匈匈有數千人聲。民視之。有大石自立。高丈五尺。大四十八圍。入地深八尺。三石爲足。石立後有白鳥數千。下集其旁。云々。

萊蕪山といふのは泰山中の一峰であらう。山のことであつてみれば、大きな岩石がそのむかし崩れ落ちてこゝした記述のもとになるやうな場合もないのではない。然し讀み直して見ると、どうもドルメンの存在を地方の農民等が発見し注意したものではなからうか、といふやうに解せられる。山東省の何處かで鳥居博士がドルメンを確認したといふ新聞記事を何時だつたか見た。今を去る二千年の昔、すでに人々が神秘的な存在として巨石建造物をながめたとすれば、あの石斧に對する彼等の解釋などと共に深い興味を催さざるを得ない。

〔小野生〕